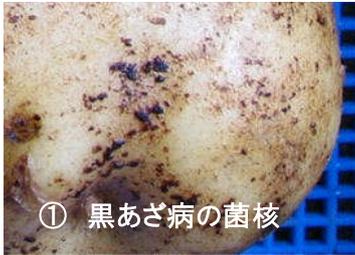


2009 年は雨が多く、ばれいしょの黒あざ病の発生が多かった地区もあると聞いています。

Q1:ばれいしょの黒あざ病の病徴は？

A:収穫したばれいしょを見ると、黒くて少し盛り上がったような菌核が付いている事があります(写真①)。



① 黒あざ病の菌核

それが黒いあざのように見えることから、この名前が付いたと思います。この黒あざ病菌はばれいしょの生育初期から発生し、萌芽間もない幼茎が被害を受け、新たに第二、第三の幼茎を生じさせ、ひどい場合には不萌芽となります(写真②)。地際部の茎が侵されることにより生育が悪くなり、下葉が黄化したり、頂葉が巻き上がり葉巻病に類似した症状となることもあります。



② 幼茎被害

Q2:伝染経路や菌の種類は？

A:第一次伝染源は種いも上の菌核や、土壌中の菌(リゾクトニア)です。ばれいしょの黒あざ病を引き起こすリゾクトニア菌は2種類に大別され、ひとつは主にばれいしょに被害をもたらしますが、もう一方はてんさいなど多数の植物を侵害します。地際の茎や下葉に白色粉状の胞子が生じることがありますが、これは伝染源にはなりません。

Q3:発病が多くなる条件は？

A:ばれいしょ植え付け後、土壌水分が多湿状態で続き、地温が低く萌芽に時間が掛かる条件だと黒あざ病の幼茎被害が多くなります。この幼茎被害が多いとストロンの発病も多くなる傾向にあります。発病がひどい株は地際からちぎられるような症状が見られますが、これはてんさいの根腐病・葉腐病を引き起こす種類のリゾクトニアが関与しています。てんさいの根腐病・葉腐病が多発した圃場の次作でばれいしょを植え付けると、黒あざ病の被害が多くなる可能性があるので注意しましょう。

Q4:収量への影響は？

A:ストロンにも褐色～黒褐色の病斑を生じ(写真③)、新塊茎の着生が妨げられて肥大が遅延し、収穫時に小芋が多くなる原因となります。これに加え、ストロンが短くなるせいでイモが主茎に密集して出来るため、形がいびつになったり、地上に露出して緑化いもの原因となるなど、二次的な減収原因となります。



③ ストロンの発病

Q5:防除法は？

A:連作を避ける、種いもは無病のものを用いるというのが基本です。種いもの浴光催芽を実施し深植を避ける(萌芽を早くすることや、収穫時の堀取りを茎葉枯凋後7～10 日以内に行うなども耕種的防除になります。農薬での防除は、ダゾメット粉粒剤の土壌混和登録がありますが、作業時期(植付 21 日前まで)やコストが現実的ではなく、種子消毒でモンセレン顆粒水和剤などが使用されています。

(2009 年 12 月 そあら一記)

参考文献

・「北海道病虫害防除提要」 北海道植物防疫協会